

『中観明句論註釈』の文献学的研究によるインド・チベット中観仏教思想史の再構築

著者	吉水 千鶴子
著者別名	Yoshimizu Chizuko
発行年	2011
その他のタイトル	Reconstructing the history of Indian and Tibetan Madhyamaka thought on the basis of the philological study of the dBu ma tshig gsal gyi ti ka
URL	http://hdl.handle.net/2241/115037

機関番号：12102

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2010

課題番号：19520049

研究課題名（和文） 『中観明句論註釈』の文献学的研究によるインド・チベット中観仏教思想史の再構築

研究課題名（英文） Reconstructing the history of Indian and Tibetan Madhyamaka thought on the basis of the philological study of the *dBu ma tshig gsal gyi ti ka*

研究代表者

吉水 千鶴子 (YOSHIMIZU CHIZUKO)

筑波大学・大学院人文社会科学部研究科・准教授

研究者番号：10361297

研究成果の概要（和文）：本研究は、チベット人シャン・タンサクパ著『中観明句論註釈』の写本解読により、インドからチベットへ、チャンドラキールティの帰謬論証を用いる中観思想がインドの仏教論理学と融合しながら伝承された 11～12 世紀の時代思潮を明らかにした。すなわちチャンドラキールティ自身が先行するディグナーガの論理学を取り入れており、中観派によって他者に真実を知らしめるための命題と論理の使用は是認される。この新しい知見により、本研究は中観仏教思想史を見直し、論理学との融合過程に焦点をあてて再構築した。

研究成果の概要（英文）：The present study has clarified by deciphering the manuscript of Zhang Thang sag pa's *dBu ma tshig gsal gyi ti ka* the Buddhist philosophical thought in the 11th-12th centuries, during which Candrakīrti's Madhyamaka view and his logical method of drawing a consequence were introduced from India into Tibet together with Buddhist logical system. It has become clear that Candrakīrti himself accepts in some parts Dignāga's logical method and that the Mādhyamika is allowed to set forth a thesis and reasoning for the sake of making others realize truth. From this new perspective, the present study has reconsidered and reconstructed the history of the Madhyamaka thought focusing on the process of integrating logic.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・印度哲学・仏教学

キーワード：中観思想、仏教論理学、チベット仏教、帰謬論証

1. 研究開始当初の背景

仏教思想の核である中観思想と論理学がインドからチベットへ伝承された 11～12 世紀におけるインドとチベットとの交流、チベット人による思想の受容については、これまで一次資料の不足のために、後代の記述を頼り

に推測されるのみであった。帰謬論証派と自立論証派という中観派の大きな二つの学説分類もこの時期になされたと考えられてきたが、確認はなされなかった。しかし、こうした学問状況は 2000 年初頭大きく変わる。当該時代の一次資料の写本が次々と発見されるようになったのである。研究代表者は、

それらの写本のひとつであるシャン・タンサクパ著『中観明句論註釈』の研究を、科学研究費補助金基盤研究（C）を得て2004年より開始した。これはインドの中観学匠チャンドラキールティ（7世紀）の『明句論』に対するインド・チベットを通じて現存する最大の完全な註釈書で、99葉におよぶ。シャンはチャンドラキールティの主著をチベット語に翻訳したパツァブ翻訳師の直弟子とされ、本写本は中観思想の伝承と受容の状況を伝えてくれるきわめて重要な資料である。

研究代表者は、この『中観明句論註釈』の著者がシャンであるという同定、シャンの中観思想の基本的立場が後代「離辺中観説」とよばれるものと一致すること、それを証明するための写本18章の校訂テキストを2006年に発表した。同年に、シャンと同時代の「カダム派」と総称されるチベット人学僧たちの大部の著作が、写本の影印版で四川民族出版社（成都）から出版された。これらは主にラサのデブン寺で発見されたもので、2009年までに90巻が出版されている。これまで知ることのできなかつたチベット仏教教学の後伝期と形成期を歴史と思想両面で研究することが可能となったのである。

これによって研究代表者の研究も、インドからチベットへの中観思想の伝承と発展という歴史的縦軸のみならず、シャンと同時代の思潮を比較検討するという歴史的横軸をも得た。研究代表者の中心テーマである中観の空思想と論理学の融合の解明について、多くの一次資料を用いての考察が可能になったのである。

2. 研究の目的

本研究は、シャン・タンサクパ著『中観明句論註釈』第1章（40葉）の写本解読を進めながら、インドからチベットで展開した中観思想史を、とくに論理学との融合というテーマに焦点を当てて再構築することを目的とする。具体的には以下5点の考察課題を明らかにする。

- (1) インドの中観派は、論証方法の違いによってチャンドラキールティを祖とする帰謬論証派とバーヴィヴェーカ(6世紀)を祖とする自立論証派とに分類されるが、その成立時期の検証。
- (2) 11～12世紀のチベットにおける中観思想と論理学の導入状況。
- (3) 『明句論』第1章におけるチャンドラキールティによる論理学批判の分析。
- (4) シャン・タンサクパによる(3)の解釈。
- (5) 中観派が受容したインド仏教論理学の哲学的枠組みの解明。

3. 研究の方法

本研究では、『中観明句論註釈』第1章の写本校訂テキストを作成し、その内容を『明句論』と比較検討しながら、上記5点の課題の考察を行なう。さらにシャンの師であるパツァブ、同時代のチベット人論理学者チャパ・チューキセンゲなどの著作をも比較検討し、シャンの思想の特徴を明らかにする。具体的方法は以下のとおりである。

- (1) 『明句論』第1章でチャンドラキールティはバーヴィヴェーカを批判し、中観派は主張命題を立てず、自立論証を用いず、帰謬論証によって他者を論駁するのみにとどまるべきである、と説いた。その議論とパツァブやシャンの解釈を比較検討し、中観派の歴史的発展とあわせて両学派の分類に至った経緯を検討する。
- (2) シャンの用いる論理学的手法に注目し、彼が受けた教育や知識の背景を考察する。
- (3) 『明句論』第1章の議論とチャンドラキールティが批判するディグナーガ(6世紀)の論理学を比較検討する。
- (4) チャンドラキールティの論理学批判と帰謬論証のシャンによる解釈を分析する。
- (5) 『解深密経』などに説かれる初期論理学の基本構造を解明し、その後の経量部による論理学の発展を、無常の証明理論と哲学理論を軸に考察する。

4. 研究成果

シャン・タンサクパ著『中観明句論註釈』第1～2章の写本校訂の基礎作業を終了し、2011年度より順次テキストを出版する準備を進めている。1章前半の内容読解も終了した。この『中観明句論註釈』は学界未見の写本であるため、そこから得られた新たな知見は多い。インドからチベットへチャンドラキールティ系の中観思想が伝承したときの歴史背景と思潮をうかがい知ることできる。また、『明句論』そのものの理解を見直す視点をも提供してくれる。シャンの中観思想については、とくに論理学をどのように受容しているのか、興味深い議論が多く見られた。研究代表者は、これらの成果を研究論文、学会発表の形で順次発表した。以下、5つの研究課題に即した研究成果の要約を示す。

- (1) 中観派を、論証方法の違いによって帰謬論証派と自立論証派とに分類する成立時期の検証。
この分類は11～12世紀にチベットで成立したと考えられてきたが、当時インドからチベットへ来たカシミールの学僧ジャヤーナダとチャンドラキールティの主著の翻訳者パツァブによって、二派の区分をなす呼称が

用いられていることが近年確認された。しかし、当時その分類がすでに定着していたとは言えない。シャンは、自立論証を用いる者を「中観派」とは認めず、中観派の分類にはまったく言及していない。この時期には解釈がまだ分かれており、二派の分類が定着するのはもう少し後代であると理解するべきである。この知見は、本研究課題の前提となるものである。

(2) 11～12 世紀のチベットにおける中観思想と論理学の導入状況。

①それまでチベットでは、シャーンタラクシタ、カマラシーラによって 8 世紀に伝えられた自立論証系の中観思想が中心であったが、この時代に新たに帰謬論証系のチャンドラキールティの思想がパツァブ、シャンらによって導入された。この新しい思想については批判もなされたが、徐々に信奉者を獲得し、15 世紀には高い評価を得るようになる。その基盤がこの時代に作られたことが明らかとなった。また、同時期にディグナーガ、ダルマキールティ(7 世紀)のインド仏教論理学に関する著作が翻訳され、論理学を重視するチベット仏教教学の形成に寄与した。中観思想と論理学の融合については、シャンの『中観明句論註釈』の解説により、次のことが推測される。すなわち、当時のインドとチベットの仏教僧院では論理学の基礎教育が浸透しており、議論の進め方はその規則にのっとり行なわれていた。中観派が用いる帰謬論証も、ダルマキールティ論理学の規則によって解釈し直されている。さらにシャンは、帰謬論証の規則は仏教論理学派ではなく、ブッダパーリタ(5 世紀)、チャンドラキールティらの中観派が創始したものであることを強調する。これは歴史的事実とは異なるが、当時のチベットで新しく導入されたチャンドラキールティの思想の価値を高めるための方策であろうと考えられる。これらの問題は、下記論文 6) "Zhang Thang sag pa's reevaluation of Buddhapālita's statement of consequence (*prasaṅga*)"において論じた。

②11～12 世紀のチベット仏教後伝期の諸事情、とくに周辺地域との交流による仏教の導入と当時のインド・チベットの仏教僧院の学問体系、教育カリキュラムなどについて、翻訳された文献や歴史資料から、次のことが推測される。チベットの僧院がモデルとしたインドの僧院は、カシミール、ネパール、東インドの僧院であった。そこででの学問体系は、すでに学派の区別を越え、論理学を基礎として中観、唯識、密教などの大乘仏教を総合的に学ぶシステムであり、チベットは個々の文献のみならず、こうした生きてきたシステムと伝統をそのまま輸入した。今日に続くチベット仏教教学の基盤はそれによって構築された

のである。今後カダム派文献の解説により、この時代の仏教の伝承と教学形成の具体像が明らかになると期待される。この考察と展望について、下記図書 1) 『西藏仏教宗義研究』第九巻、トゥカン『一切宗義』「カダム派の章」の序論「カダム派の時代」で論じた。

(3) 『明句論』第 1 章におけるチャンドラキールティによる論理学批判の分析。

①チャンドラキールティによる論理学批判の基本的立場を示す「中観派には自らの学説を論証するための主張命題はない」という言明について、その意図を分析すると、彼が必ずしも「主張命題」を提示することそのものを拒否しているわけではないことが明らかになった。彼は『明句論』によって註釈するナーガールジュナ(2 世紀)の『中論』第 1 章第 1 偈の四句不生の言明を「主張命題」と呼び、それは他者に不生の真実を知らしめる意図でナーガールジュナが確定し、提示したものである、と解釈する。この手続きは、論理学者ディグナーガが「他者のための推論」で用いる規則と等しい。ただ、中観派は実在論者である対論者と共通認識を持ち得ないために、対論者が立てる主題を仮に認めて論理を展開するので、「中観は自らが認める主張命題」はないとするのである。

②チャンドラキールティは中観派が用いるべき正しい論証方法は帰謬論証である、と考えるが、その帰謬論証の方法は、ディグナーガがその主著『集量論』で説くものと一致する。この点でも、チャンドラキールティはディグナーガ論理学を一部批判するとはいえ、その規則に従いながら中観派にとって有効な論証方法を構築しようとしていたと言える。これは従来の学界の常識をくつがえすものであり、新しい見解である。

研究代表者は上記①②の論点を、下記論文 1) 「チャンドラキールティの論理学」、学会発表 1) (同題)、2) "The logical value of the thesis (*pratijñā*) in Candrakīrti's Madhyamaka thought"で論じた。

(4) シャン・タンサクパによる(3)の解釈。

①シャンは『明句論』における「中観派には自らの学説を証明する主張命題はない」という言明を、「仏教論理学派の定義に従った主張命題はない」という意味であると解釈した。すなわち「自ら承認した、実在を証明するための主張命題」はないというのである。一方、仮に立てられた主張命題を用いることは承認している。また、中観派の用いる主張命題はすべて否定命題であるが、シャン独自の「否定」の解釈として、否定対象は本来存在しないので、否定という事実、あるいは何かの無という属性も認められないので、「中観派は否定すらも否定する」という見解を提示

する。これは後代「離辺中観説」と呼ばれる学説の根本理解である。このシャンの思想解明は、下記論文 2) “*Āñ Thaṅ sag pa on theses (dam bca', pratijñā) in Madhyamaka thought*”、学会発表 3) (同題) で行なった。

②シャンの帰謬論証理解はチャンドラキールティにもとと比較すると、はるかに発展したものである。それはダルマキールティ以降の仏教論理学の形式を踏襲し、新しい形となっている。大きな相違は、チャンドラキールティは問題としなかった帰謬論証の論理的遍充をシャンは問題とし、その遍充を証明するためのさらなる論証を求めた、という点である。これは上記(2)①で述べた時代の要請によるものであろう。この問題は下記論文 6) “*Zhang Thang sag pa's reevaluation of Buddhapālita's statement of consequence (prasaṅga)*”において論じた。

(5) 中観派が受容したインド仏教論理学の哲学的枠組みの解明。

インド仏教論理学は、単なる形式論理学ではなく、その役割は仏教の教義を証明することにある。従って存在論、因果論などの仏教哲学を基盤としている。その枠組みの解明のために次の 2 点に着目した。

①瑜伽行派の基本典籍のひとつである『解深密経』第 10 章には「無常、無我、苦」という仏教の根本教義を証明する推論が述べられている。それはディグナーガ以前の初期の論理学の形を示すものであり、インド論理学史を知る上でも重要であるが、難解なためこれまで明らかにされてはこなかった。研究代表者は、下記論文 3) “*The Logic of the Saṃdhinirmocanasūtra: Establishing Right Reasoning Based on Similarity (sārūpya) and Dissimilarity (vairūpya)*”においてその解明を試み、後代の論理的遍充関係にもとづく推論とは異なり、多くのものについての「類似性」「非類似性」を根拠として行なわれる推論の方法を明らかにした。

②①より発展した論理学が経量部とよばれるヴァスバンドウ (4 世紀)、ディグナーガ、ダルマキールティによって体系づけられたが、その経量部の根本学説である一切法無常の証明に用いられる論拠「恒常なものは効果的作用の能力がないがゆえに存在しない」という考えはいかなる哲学的理論に基づくのか、解明が待たれていた。研究代表者はこの問題を精査し、下記論文 10) “*Causal efficacy and spatiotemporal restriction: An analytical study of the Sautrāntika philosophy*”において次のことを明らかにした。経量部の理論によれば、「存在」とは必ずある時ある場所限定されているものである。こうした「存在」を生み出すものはそれ自身がある時、ある場所限定されて存在しなくてはならない。と

ころが恒常なものは時間的場所的制約を受けないので、新たな存在を生み出す原因にはならないのである。これは仏教の基本的な因果論でもあり、存在論でもあり、きわめて重要な考え方である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 11 件)

- 1) 吉水千鶴子 「チャンドラキールティの論理学」『印度学仏教学研究』59-1, pp.(122)-(127), 2010 年 12 月. 査読有。
- 2) Chizuko Yoshimizu, “*Āñ Thaṅ sag pa on theses (dam bca', pratijñā) in Madhyamaka thought.*” *The Journal of International Association of Buddhist Studies* vol.32, Number 1-2, 2009 (2010), pp.443-467, 2010. 査読有。
- 3) Chizuko Yoshimizu, “*The Logic of the Saṃdhinirmocanasūtra: Establishing Right Reasoning Based on Similarity (sārūpya) and Dissimilarity (vairūpya).*” *Logic in Earliest Classical India*, Brendan S. Gillon (ed.), *Papers of the 12th World Sanskrit Conference held in Helsinki, Finland, 13-18 July 2003* (General editors: Patteri Koskikallio & Asko Parpola), vol. 10.2, pp.139-166, Delhi 2010. 査読有。
- 4) 佐久間秀範 「インド瑜伽行派諸論師の系譜に関する若干の覚え書き — 弥勒・無着・世親 —」『哲学・思想論集』第 3 5 号 (筑波大学 哲学・思想専攻) 2010, pp.17-51. 査読無。
- 5) 小野基 「相違決定(viruddhāvabhicārin)をめぐる」小野基 『インド論理学研究』松本史朗教授還暦記念創刊号、駒澤大学 2010, pp.125-143. 査読無。
- 6) Chizuko Yoshimizu, “*Zhang Thang sag pa's reevaluation of Buddhapālita's statement of consequence (prasaṅga).*” 『哲学・思想論集』34 (2008), 筑波大学哲学・思想専攻 pp.81-99, 2009 年 3 月. 査読無。
- 7) 佐久間秀範 「安慧和玄奘教義理論的相似性」『漢語佛教評論』第一輯第 1 卷, 2009, pp.58-76. 査読無。
- 8) 佐久間秀範 「法相宗所伝の諸論師系譜の再考」『多田孝正博士古稀記念論集 仏教と文化』山喜房仏書林 2008, pp.171-194. 査読有。
- 9) Hidenori Sakuma, “*On doctrinal similarities between Sthiramati and Xuanzang.*” *Journal of the International*

Association of Buddhist Studies,
29-2(2006), 2008, pp.357-382. 査読有。

- 10) Chizuko Yoshimizu, "Causal efficacy and spatiotemporal restriction: An analytical study of the Sautrāntika philosophy." *Pramāṇakīrti. Papers dedicated to Ernst Steinkellner on the occasion of his 70th birthday*, Part 2. B. Kellner, H. Krasser, H. Lasic, M.T. Much, H. Tauscher (eds.), Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde 70.2, pp.1049-1078, Wien 2007 査読有。
- 11) Hidenori Sakuma, "In Search of the Origins of the Five-Gotra System." *Journal of Indian and Buddhist Studies*, 54-3, 2007, 3, pp.1112-1120. 査読有。

[学会発表] (計4件)

- 1) 吉水千鶴子 「チャンドラキールティの論理学」2010年9月10日、日本印度学仏教学会(立正大学)。
- 2) Chizuko Yoshimizu, "The logical value of the thesis (*pratijñā*) in Candrakīrti's Madhyamaka thought." 2009年9月1日、第14回国際サンスクリット学会(京都、日本)。
- 3) Hidenori Sakuma, "On doctrinal similarities between Sthiramati and Xuanzang". 2008年6月29日、第15回国際仏教学会(アトランタ、アメリカ)。
- 4) Chizuko Yoshimizu, "Zhang Thang sag pa on theses (*dam bca'*, *pratijñā*) in Madhyamaka thought." 2008年6月24日、第15回国際仏教学会(アトランタ、アメリカ)。

[図書] (計1件)

- 1) 井内真帆・吉水千鶴子 『西藏仏教宗義研究』第九巻、トゥカン『一切宗義』『カダム派の章』財団法人東洋文庫 2011年3月、ii+127頁。

[その他] (計2件)

- 1) [書評] 吉水千鶴子 「チベット仏教研究に新時代を開くか」(『喝当文集』ほか) 『東方』332, 2008.10. pp.20-23.
- 2) [監修] 塩尻和子・津城寛文・吉水千鶴子 『図解宗教史』成美堂出版 2008年、143頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉水 千鶴子 (YOSHIMIZU CHIZUKO)
筑波大学・大学院人文社会科学研究科・准教授
研究者番号：10361297

(2) 研究分担者

佐久間 秀範 (SAKUMA HIDENORI)
筑波大学・大学院人文社会科学研究科・教授
研究者番号：90225839

小野 基 (ONO MOTOI)
筑波大学・大学院人文社会科学研究科・准教授
研究者番号：00272120